

学校における系統だったIT化分野の検証研究

— IT 化の問題点とこれからの方向 —

三 谷 雅 章 (桜の聖母学院中学・高等学校)

1 きっかけ、ならびに研究の方向

- ① IT 化したのに、学校の忙しさが全然なくなる。
- ② IT 化したのに、コストが削減できない。
- ③ IT 化したことで、IT に通じた若手が偉ぶって、ベテラン教師が（しかも、生活指導などで有能な教師に限って）、定年を待たずにそと身を引いていく。
などということここ数年感じてきた。

しかし、だからといって IT 化は役に立っていない——つまり IT 不要論は、時代錯誤になるだろう。例えば、IT 化によってペーパーレスを図ったのに、いっこうに机上の紙が減らない、コストが減らない、などなどあるが、だからといって、IT 化廃止を唱えるのは論理の飛躍になる。今できなくてもいずれ、それはできるようになるだろう。始めなければ、前には進めない。IT の問題そのものを今あげつらったとしても、それらはいずれ解決されることになるからで、IT の将来性は否定できない。

そこで、IT 化の波は逆らいがたいという認識に立ちつつ、ではこれからどうしたらいいのか、ということを考えていきたい。

つまりは、IT 化と学校という企業との関わり方を考えたい。

2 学校の IT 化の目的

なぜ学校は IT 化するのか。その意図を改めて考えると、

- ① 仕事の効率化かつ透明性、人為ミスの減少
- ② 学校の魅力の発信（宣伝、広報）
- ③ 紙の削減によるコストの削減
- ④ 生徒の把握の向上

といったことが、挙げられる。

例を挙げると、

- 1) 成績処理プログラムにより成績処理にかかる時間が短縮できたため、その代わりに定期試験の日程をできるだけ学期末に持つていくことができる。
- 2) 成績の IT 化により、学校全体として教科をチェックできる。特定の教科や生徒に対して平常点が異常に高かったり、低かったりする場合は調べられる。
- 3) 生徒の学力だけでなく、傾向全般をデータ化することで、誰でも生徒の状況を把握できる。担任が変わると、生徒の状況がわからないということがなくなる。
- 4) 一般業務の短縮ができたため、それにかけていた時間をより有効に活用し、生徒の学力向上などにより力を注ぐことができる。
- 5) ホームページにより、学校の様子を紹介し、より開かれた学校にしていくことで、在校生だけでなく、卒業生や、社会からも親しまれ、入学生徒増につなげていく。
- 6) メールによる連絡網により、生徒から保護者への連絡がより緊密になる。諸届けなどもホームページからコピーすることで、保護者がわざわざ学校に足を運んだり、教員が保護者の届けに行ったりするなどの手間が省ける。
- 7) 授業での活用（資料などの提供、e-learning など）

8) 入試業務の簡素化

3 欠けている厳密なコスト意識

2の目的から見ると、一般企業がIT化を進める大事な目的であるコストカットが目的とされていないことがわかる。

学校は、一般企業と違って、利益をIT化の目的としていない。

一般企業の場合、IT化をする場合としない場合で諸費用の計算をして、何年か後に

IT化投資した場合の利益 > しなかった場合の利益

という式ができれば導入ということになる。

このIT化した場合の利益（IT化導入における投資の可否）というのは、

IT化した場合の利益 = IT化の純利益 - (機器取得費 + 減価償却費 + 維持費)
--

ということになる。しかし、学校の場合は、IT化した場合の純利益がそもそもはっきりしていない。そのためか、その後かかる維持費、セキュリティにかかる費用もあまり厳密なコスト意識を持って行われていない。「しかたない」「なるべく安く」ということだけで具体的にどれだけという意識がない。

IT化した場合の利益というのは、生徒増に反映されていくのであろうが、生徒増はもちろんIT化だけでなく、学校全体のいろいろな取り組みが奏功したことになるから、直接的なIT化の利益は目に見えにくいのが実情である。

さらに、そんな中でコンピュータはどんどん新たに更新する必要がある。

つまり、ひとたびIT化すると、コストは削減されるどころか、どんどん膨らんでいく仕組みになっている。

某学校のIT関連経費

整備内容	費用	主な項目
コンピュータ教室設置 (単年度)	36,200,000円	PC等OA機器、ネットワーク機器一式、初期導入ソフトウェア、教室改造費、LAN配線
毎年の維持費	5,000,000円	インターネットセキュリティソフト更新料、ネットワーク保守料、インターネット接続料
毎年のホームページ更新料	46,4000円	
リース料、各校務分掌のIT関係備品購入	???	

毎年1年でも最低550万円かかっている。

4 時間の効率化の問題…教員のITスキルのムラ

学校がIT化する際に、コスト面は軽視されていると述べたが、そもそも目的自体も達成されているのか。各校務分掌でさまざまに使われているIT関連業務をあげてみると、

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・教務関係…名簿作成、成績処理、出席管理、成績分析、通知票や指導要録作成、保護者への通知 ・進路指導関係…調査書、データ分析 ・保健関係…体重、身長等の管理 ・危機管理…メール連絡網 ・事務関係…住所管理 ・広報入試関係…ホームページ、各学校の発送あて先シール、入試データ ・学校全体…職員間の連絡 |
|---|

など、さまざまな面があげられる。

教員個人レベルでも、

- ・授業のプリント作り
- ・データの収集
- ・成績処理
- ・クラスのブログ、生徒とのメール連絡

などがあげられる。

これらによって、人為ミスが減り、また仕事の透明性が高まったことは事実である。しかし、時間の効率化はされたのか。

これらの仕事がどうやっで行われているかを考えると、教員個人のスキルに応じて行われている。

そうすると、IT スキルのある教員には、時間の効率化は図れているかもしれないが、IT スキルの足りない苦手な教員にはかえって時間のかかる作業になる。

そういう IT スキル不足を自覚する教員は、その修得に日ごろも時間を使わなければならない。

つまり、学校そのものとしては、時間の削減にはなっていないが、教員レベルで言えば、IT スキルの足りない教員は、かえって時間がかかり、また日ごろの IT の研修に時間を割かれ、忙しくなって、例えば生徒と向き合う時間がなくなっているのが実情ではないだろうか。

教員個人の IT 技術の修得時間 > 学校の IT 化による時間の短縮
ということである。

5 ビジョンなき IT 化

前述した「教員の IT スキルが違う」ことは、さらに問題がある。

それは、IT スキルのいる教員がいなくなれば、その校務分掌の IT 化がなくなってしまう可能性があるということである。2 で述べたように、そもそも学校の IT の仕事はコストが意識されていないから、それが手仕事に戻ったところで差し支えない。また、その仕事を手仕事に戻れないような仕事の場合は、他の校務分掌に移った元担当者が、依然それを引きずらざるをえない場合もある。

そのような状況では、せつかくの IT 化を進めても、進歩の見られないものとなっている。ビジョンなき IT である。

例えば広報がホームページを立ちあげる。しかし、担当者が変わると、もうホームページがあればいいということで、これからどう進展させていこうという考えが生まれず、ただ更新さえすればよいということになる。最悪の場合は、何年も同じものがそのまま掲載されていて、かえってマイナスの PR 効果になるのではないかと思える。そこに何が必要かというコンセプトなしに継続される。だから、必要な情報がない。魅力なきホームページが垂れ流しされていく。

6 IT は教員にプラスばかりなのか？

放課後になると、教員が、こぞってパソコンに向き合っている。何をしているのかと言えば、生徒の進路先やデータの入力だったり、HP の作成だったり、授業のプリント作りだったり、テスト作りだったり、もちろん学校の仕事に関することである。しかし、生徒との直接的な関わりが失われている。

IT 化が進み、コンピュータに向き合う時間が増えた分、生徒との関わりは少なくなる。結果として、生徒と向き合おうと心がけるまじめな教員ほど、二つのものを得るため忙しくなるということになる。その一方、生徒に関して、あるいは学校に関してコンピュータを動かしてさえいれば、教員として働いているという考えの教員がでてきていないか。

IT 化によって、生徒に対してより正確な情報が早く伝えられたり、テストの質を高めることができたりするのは紛れのない事実だが、テスト作成ソフトを使ったプリントやテストで、安易に授業を進めたり、テストをしたりする可能性も生まれているのも事実である。

それだけではない。IT スキルのある教員は、IT 化されることで、当然自分たちに負担がかかってくることを予想して、よりよい IT 化がわかっているながら、黙ってしまう（スルーする）こともありうる。

7 まとめ、解決策、提案

以上、ITの功罪を見てきたが、問題点をまとめると、学校のIT化は、学校という性格上、採算性が考えられておらず、またITスキルに教師のムラがある中でIT化が進められたために、ITに長じた教員を増長させてきた面があった。

可能な解決策として考えられるアイデアをここであげてみたい。

① コスト意識の徹底

まずすぐできることとして、自分の校務分掌にどれだけITコストが使われているかを教員に意識徹底させるべきである。知っていれば、いい加減な仕事はできないはずである。しかし、ITスキルのない教員にはいっそうの重荷となるかもしれない。

② 横断的なIT専門の校務分掌の設置、ビジョンの設置

そこで、教員個人がITにかかる時間を省くためにも、また各校務分掌それぞれのITのムラを解消するためにも、ITスキルのある教員を集めた、各校務分掌を横断化したIT専門部を置き、そこでIT関連の仕事を一括して行わせる。そこで、学校全体のIT計画を練り上げ、各校務分掌に、より効率的なIT化を提案、実行する。

③ データの一元化、そしてモラル・ハザードとしての可能性

②において、学校全体のIT計画を練り上げ、と述べたが、では、どんなITビジョンを描けばよいのだろうか。それがないうまに、ITスキルのある教員だけを集めれば、前車の轍になる恐れがある。

まず第一は、前述の通り、コストカットは学校においては見えにくいものの、推し進める必要がある。

次に、業務（時間）の効率化、そしてそれをいかに生徒の活動と直結させるかも重要になる。このためにはデータの一元化は必要である。

さらに、IT化にモラル・ハザードとしての目的をはっきりと持たせて、ビジョンを作ることを提案したい。「教員は一国一城のあるじ」という言葉がある。最近では、さすがにそういう部分はなくなりつつあるようだが、それでも学校は教科会や校務分掌がそれぞれ群雄割拠している状況がある。他の教科のやり方に口を挟むことなど、もつての他という傾向もある。

そこで、ITに学校の校務分掌や教科を横断化した役割を与えるのである。モラル・ハザードとしての一種のチェック機能になる。

具体的には、成績面、予算などで効果があると思われる。

- ① 各教科の平均点がバランスがよくなっているか、あるいは担当者によって平均の差がでていないかのチェック
- ② 平常点がきちんとでているか（教員のえこひいきで飛びぬけて低かったり、高かったりする例がないか）
- ③ ホームページでのシラバスの掲載を行う。学校に対する意見受付も行う。
- ④ 副読本、教材の買いすぎについて上限を決める。各教科で買っている副読本の全体予算の枠組みを決め、それをコンピュータに入力し、管理させる。

このようなことは、もちろんこれまでも行われてきただろうが、あくまでも生徒の動向を見るという立場からで、管理的な面からの意識は薄かったように思う。

しかし、少子化や先の見えない経済状況の中、学校を取り巻く情勢はより厳しさを増しつつある。コンプライアンスが求められつつある今、組織としてのよりよい学校を作るためにも、このようなことは必要である。